

Direct experiences with nature and natural materials in Satoyama Project for young children : Analysis of the pilot activities in the first semester of the first year

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/39056

幼児を対象とした里山ゾーンにおける自然活動： 前期（4～7月）の取り組みから

滝口 圭子

Direct experiences with nature and natural materials in Satoyama Project for young children : Analysis of the pilot activities in the first semester of the first year

Keiko TAKIGUCHI

問題と目的

現在、保育所、幼稚園をはじめとするほとんどの保育施設、幼児教育機関において、自然に触れられるような何らかの装置や工夫を見出すことができる。一般的なものとして、花壇、菜園、動物飼育、昆虫飼育等が挙げられよう。

現代の日本の保育に影響を与え続けているフレーベル (Fröbel, Friedrich 1782-1852)、モンテッソーリ (Montessori, Maria 1870-1952)、倉橋惣三 (1882-1955) は、子どもの成育にとっての社会的環境がまだ整っていなかった時代に、子どもの発達にとっての自然の意義を提示し、高く評価していた (井上, 2012)。また、1956 (昭和31) 年に刊行され、これまでに4回の改訂を経てきた幼稚園教育要領においては、子どもと自然とのかかわりの重要性について常に言及があり、それは1965 (昭和40) 年に制定され、これまでに3回の改訂を経た保育所保育指針においても同様である。現在、幼稚園教育要領 (文部科学省, 2008) には「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」という記述があり、保育所保育指針 (厚生労働省, 2008) においては「自然との触れ合いにより、子どもの豊かな感性や認識力、思考

力及び表現力が培われることを踏まえ、自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」という記述が確認される。以上を踏まえると、日本の保育は、子どもの育ちにおいて果たす自然の役割を、従来よりある程度認識してきたと考えてよさそうである。かように保育内容の一領域として、その教育的意義を認識されてきた自然であるが、近年、これまでになく幼児を対象とした自然活動や野外保育に注目が集まっている。

幼児を対象とする自然活動や野外保育への注目を促す動きとして、以下の2つの系譜が確認される。まず、石亀 (1995) により写真集を通して日本に紹介されて以来、少しずつ、また確実に認識されてきた「森のようちえん」である。今村 (2011) は、森のようちえんを「森などの自然豊かな場所で、年間を通して、子どもを保育する活動とその団体名」と定義する。こうした森での保育の活動は、1950年代にスウェーデンやデンマーク、ドイツで生まれたが、現在、欧米をはじめ、急速に世界各国に広がりつつあり、日本においても2005 (平成17) 年から、森のようちえんの関係者らが集う「森のようちえんフォーラム」が開催されている。こうした活発な動きの背景には、森のようちえんが日本に紹介される以前から、子どもたちの自然体験の不足を危惧し、乳児・幼少期の子どもたちへ自然体験の機会を提供しようと活動してきた団体

や個人の存在があった。全国各地で、幼児を対象とした自然体験教室や自然体験を重視した幼児教育を行っていた団体が、森のようちえんの名の下に集まり、情報を交換するようになり、活動が広がりを見せている(今村, 2011)。ちなみに、初等中等教育段階の児童生徒等が主たる対象とはなっているが、2013(平成25)年6月に閣議決定された第2期教育振興基本計画(平成25年度~平成29年度)(文部科学省, 2013)においては、生きる力を育成するための基本施策として、豊かな心の育成が掲げられ、その豊かな心の育成のために「生命や自然を大切にす
る心や他人を思いやる優しさ、社会性、規範意識などを育てるため、学校における自然体験活動や集団宿泊体験等の様々な体験活動の充実に、関係府省が連携して取り組む」ことが明記されている。1996(平成8)年の中央教育審議会第1次答申(文部省, 1996)において提言された「生きる力」を育成する上で、自然体験活動が一定の役割を果たすと考えられているといえよう。

さて、幼児を対象とする自然活動や野外保育への注目を促すもう一方の系譜として、持続可能な社会の実現を想定した環境教育の一環として自然活動をとらえる動きがある。井上(2012)は、世界的な動向として幼児期の環境教育が動きつつあると指摘し、21世紀に入り、日本においても、子ども対象の自然体験型環境教育の実践を継続してきた民間のNGO等が、その対象を幼児にも広げ、行政にも環境教育・環境学習の対象に幼児を含める動きが出始めていることを紹介している。井上(2012)は、もともと日本の保育は、自然や生活を大切にし、環境教育につながりやすい実践を十分に行ってきた教育分野であることを評価しつつも、今まで通りの保育実践をラベルだけ貼り替えて幼児期の環境教育と呼び直すことを警戒している。近年、自然とのかかわりがなぜ必要かという基本理念を示しながら、その理念に基づいた自然とのかかわりの具体的な在り方や方法を示した実践書(井上・無藤・神田, 2010)も出版されるよう

になり、持続可能な社会を創る将来世代を育てるという理念に則った実践事例の蓄積が期待されている。こちらの動向についても、第2期教育振興基本計画(文部科学省, 2013)において言及が認められ、生涯を通じた自立・協働・創造に向けた力を修得するための主な取り組みとして「ユネスコスクールの質量両面における充実等を通じ地球規模での持続可能な社会の構築に向けた教育(持続可能な開発のための教育 education for sustainable development: ESD)を推進する」ことが掲げられている。

そうした動向の中、2012(平成24)年度から「金沢大学里山ゾーンを活用した幼児向け自然教育プログラムの開発」(以下、里山プロジェクトと表記)が開始された。本プロジェクトは、地球環境基金の助成を受けた「ESDを活用した北陸における生物多様性保護等の推進」事業の中のESDモデルプロジェクトの一環として実施されたものである。プロジェクトに参加したのは国立大学法人K大学附属幼稚園(以下、K幼稚園と表記)と、金沢市内の私立幼稚園であるB幼稚園であった。両幼稚園から、里山自然活動を単発的なイベントとして実施するのではなく、1年を通じて定期的に里山を訪れながら、活動を発展させていくことについて了解を得ることができた。本プロジェクトにおける里山自然活動は、「融合型森のようちえん(日々の生活を園舎で行っているが、年間を通じて月に数回から10回程度、森へと出かけて活動を行うタイプ)」(今村, 2011)に分類されるといえよう。ESDとしての自然活動と森のようちえんの活動を厳密に区別する意味も必要性もそれほどないが、本プロジェクトは、ESDモデルプロジェクトの一環として実施され、その形態は「融合型森のようちえん」に分類されるという立地は、認識しておくべきであろう。

さて、近年の自然活動や野外保育の盛り上がりに比して、自然活動の実践事例を詳細に記述した先行研究は極めて少ない。佐々木(2008)は、専用の園舎やフィールドを特定せず、行事

として幼児対象の環境教育活動を行うタイプの「行事型森のようちえん」（今村，2011）の11回の活動を報告している。この活動では親子での参加が奨励されており，参加者も参加人数も開催日によって異なっているため，活動を継続することによって見受けられる子どもの変容の確認が難しくなっているようだ。また，仙洞田・山内（2011）は，甲信地域の森のようちえん3園の活動を紹介している。記述から，「融合型森のようちえん」が2園，「通年型森のようちえん」（年間を通して森の中で保育を行う本格的な森のようちえん）（今村，2011）が1園という内訳であると推測される。融合型及び通年型の森のようちえんの活動が紹介してあるという点で貴重であるが，各園の観察がそれぞれ1～2回と少なく，活動が継続されていく様子がわからない。一方，小笠原・前田（2009）は，高機能自閉症や広汎性発達障害の疑いが告げられた4名の子どもを対象に，自然環境を利用した野外での個別保育（保育士1名と対象幼児1名で，2週間に1回90分間の活動）を実施し，その経過と個別保育後の日常生活の様子をまとめている。この研究は，集団ではなく個別保育を実施しているという点が特徴的であるが，本研究とは実施形態が異なっている。また，対象児の活動別に，全体的な概要が記述されており，活動の日付や回数，また各回の具体的な内容は紹介されていない。

以上のように，本研究が実施する「融合型森のようちえん」（日々の生活を園舎で行っているが，年間を通じて月に数回から10回程度，森へと出かけて活動を行うタイプ）の活動を，詳細に記述した研究は見当たらない。また，本プロジェクトは2012（平成24）年度から着手されているが，幼児が実際に里山ゾーンで活動するのは2013（平成25）年度が初年度となる。「融合型森のようちえん」としての里山プロジェクトにおいて，里山ゾーンの資源をいかに活用することができるのか，また，自然活動を通して，子どもたちは何を考え，何を学んでいくのか，

加えて，子どもたちの周囲にいる我々は，子どもたちに何を提供していくことができるのか等を明らかにするための資料を収集する必要がある。本研究の目的は，2013（平成25）年度里山プロジェクトの前期（4～7月）の活動の履歴をまとめることを通して，「融合型森のようちえん」の実施可能性を探るとともに，金沢大学里山ゾーンを活用した幼児向け自然教育プログラムの開発に資する基礎的資料を提供することである。

方 法

里山自然活動幼稚園参加者 K幼稚園は，5歳児クラスT組21名及びH組22名計43名が参加し，活動には各クラス担任，養護教諭，副園長等が同行した。B幼稚園は，5歳児クラスY組41名が参加し，活動にはクラス担任，園長等が同行した。活動回によって，他の保育者や保護者が参加することもあった（表1，2）。

里山自然活動実施側参加者 里山自然活動の実施側参加者は一定ではなく，その時々で異動があったが，主たる参加者は以下の通りである。まず，自然学校インストラクターとして活動している木谷一人氏である。アイスブレイク，危険時の身の処し方，自然との具体的ななかかわり方等を幼稚園参加者に伝え，その日の活動を方向づける役割を担当した。次に，里山で稲作をはじめとする保全活動に参加している畑尾均氏である。特に，稲作に関する活動に取り組む際に，主導的役割を担った。また，大学スタッフとして，笠木幸枝氏（金沢大学地域連携推進センター）が両幼稚園の全活動に同行し，活動を記録した。本研究で紹介する写真は，全て笠木氏の撮影によるものである。筆者は，K幼稚園の活動については，有志の父親の会パパーズの活動（5/6）及び宿泊体験活動（6/28）を除く5回の活動に参加し，B幼稚園の活動には2回参加した。活動回によって，他のインストラクターや大学関係者，学生ボランティアが参加することもあった（表1，2）。

表1 2013(平成25)年度前期のK幼稚園の里山自然活動の概要

回数	月日	幼稚園のねらい	活動内容	幼稚園参加者	インストラクター	大学関係者
1	4月18日(木) 10:10-13:30	里山に親しみをもち	森への挨拶 ¹⁾ 『ハグくまさん』 ²⁾ 読み聞かせ 森へ氏と野村氏から話を聞く 里山で焼んだゴモギで作ったゴモギ団子を食べる	担任2名 養護教諭 副園長	木谷一・木谷あ 畑尾・野村	松下・笠木 滝口 学生ポラ ⁵⁾ 3名
2	5月2日(木) 10:00-13:00	春の自然をからだいっぱい 感じながら、友達や先生との 触れ合いを楽しむ	4歳児クラス、5歳児クラス合同遠足 『ハグくまさん』読み聞かせ コナラの栗生の紹介 畑尾氏から田の話聞く	担任4名 補助教諭 養護教諭	木谷一 畑尾	笠木 滝口 学生ポラ4名
3	5月6日(月・祝) 9:00-13:30	①父子の触れ合いを楽しむ ②春の里山の自然に触れ親しむ ③父親の活動経験を広げる	有芯の父親の会(バーズ)の活動 有芯の父子が参加 タケノコ掘り、竹切り 竹細工(竹ポックリ、起き上がりこぼし等)	担任2名・教諭2名 養護教諭 園長・副園長	林 大海	鈴木 笠木 学生ポラ2名
4	5月15日(水) 10:15-13:10	自分なりに里山の自然と 関わり楽しむ(田んぼを中心)	『てのひらおんどんぼい』 ³⁾ 読み聞かせ 各自で田んぼに入ったり、小川に入ったり、 野村氏と一緒に水生生物を観察したりする	担任2名 養護教諭	木谷一 野村	鈴木 滝口 学生ポラ3名
5	6月4日(火) 10:00-13:00	①草花や虫などを見つけたりそれ に触れたりしながら、里山の自然と 関わり楽しむ ②泥の感触を 楽しみながら、田植えを楽しむ	『かぜびゅんびゅん』 ⁴⁾ 『てのひらおんどんぼい』 田植え(2班に分かれ、1班ずつ、田んぼにつけ てめったマス目の交差した点に苗を植える) 各自で自由に活動する(砂石けん等)	担任2名 養護教諭 副園長	木谷一 木谷あ 畑尾	鈴木 滝口 学生ポラ7名
6	6月28日(金) 10:00-13:00		宿泊体験(有志の父親17名参加) 里山ハイキング(稲の成長の確認～焼き畑まで の斜面登り～展望台までの山歩き)	担任2名・教諭3名 養護教諭・副園長 補助教諭3名		鈴木 笠木 学生ポラ1名
7	7月10日(水) 10:00-13:00	苗の生草に気づき、田んぼの 草取りを楽しむ	田んぼの話を聞き、苗の成長を確かめる 田んぼの草取り(田んぼの中での作業の他に 畦の草を取って田の中の友達に渡す作業も)	担任2名 補助教諭 保護者3名	畑尾	鈴木 滝口 学生ポラ5名

注1) 2回目以降の記事はないが、森への挨拶は、アジチ谷への出発前に毎回実施された。

2) ニクラス・オールドランド:作絵 落合恵子・訳 『ハグくまさん』 クレヨンハウス 2011年

3) 浜口哲一・作 杉田比呂美・絵 『てのひらおんどんぼい』 福音館書店 2009年

4) 新井洋行・作絵 『かぜびゅんびゅん』 童心社 2012年

5) 学生ポラメンバー: 学類2年生から教育学研究科1年生まで多様な学年の学生及び院生が参加した。

表 2 2013 (平成 25) 年度前期の B 幼稚園の里山自然活動の概要

回数	月 日	幼稚園のねらい	活 動 内 容	幼稚園参加者	インストラクター	大学関係者
1	4月19日(金) 10:10-13:00	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、その子らしさを発見する。 ②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。	森への挨拶とお祈り ⁶⁾ 『ハグくまさん読み聞かせ』 炭焼き小屋のタケノコ探し、コナラの葉生の紹介 田んぼの中や畦で自由に行動する 田んぼの草取り(虫除けスプレー用)、草木塔の説明 田んぼの草取り	担任2名 主任 園長	木谷一 木谷あ 畑尾 根尾可	鈴木 空木 濱口
2	4月22日(月) 10:10-13:00	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、その子らしさを発見する。 ②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。	読み聞かせ(水遣や保業者や植物とハグする) キイチゴとタケノコの確認 ハンパジャコロの石垣塗り 田んぼの中や畦で自由に行動する 友達や保業者や植物とハグする	担任2名 園長	畑尾 根尾可 根尾可	鈴木
3	5月13日(月) 10:20-13:00	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、その子らしさを発見する。 ②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。	友達や保業者や植物とハグする キイチゴとタケノコの確認、炭焼き畑に入る いもも真つつけとハンパジャコロの石垣塗り 田んぼの中や畦で自由に行動する	担任2名 園長 保護者5名	畑尾	鈴木
4	5月14日(火) 10:20-13:00	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、その子らしさを発見する。 ②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。	友達や保業者や植物とハグする キイチゴとタケノコ探し、フネ採り 炭焼き小屋のタケノコ探しや葉っぱ遊び 田んぼの中や畦で自由に行動する	担任2名 園長 保護者4名	畑尾	鈴木
5	6月8日(金) 10:10-13:00	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、その子らしさを発見する。 ②泥の感触を楽しみながら、田植えを行う。	『このひらおんぶん』読み聞かせ 田植え(2班に分かれ、1班ずつ、田んぼに渡された畑につけられたりばんの位置に苗を植える) 焼畑から遊園台に登る道を通って帰る	担任2名 園長	木谷一 畑尾	鈴木 濱口 学生ボラ1名
6	6月24日(月) 10:20-14:00	①里山の中で、自然を見つめたり不思議さを感じながら遊ぶことを楽しむ。②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。③異年齢のかかりの中で、自然の中での過ごし方を知る。	4歳児クラス、5歳児クラス合同活動 5歳児クラスは畑の成長を確認して自由行動 生き物観察、ままこと遊び、テント作り等 4歳児クラスは『わたしのワンピース』 ⁷⁾ 遊び	担任4名 園長	木谷一 畑尾	鈴木 学生ボラ1名
7	6月25日(火) 10:25-13:00	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、その子らしさを発見する。②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。③自然物を扱い、工夫して遊ぶことを楽しむ。	ヤマグラの葉の確認 野村氏からトンボの種や見分け方等の説明 田んぼの周囲での自由行動 生き物観察、テント作り 保護者にキイチゴやヤマグラの葉を贈る	担任2名 園長 保護者5名	野村	鈴木
8	6月26日(水) 10:15-12:15	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、自分らしさを発見する。②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。③花や草、枝や木の葉などを集めて遊びながら、遠くに集めたり掃除を楽しむ。	保護者にキイチゴやヤマグラの葉を贈る 田んぼの周囲での自由行動 6/24(月)から取り揃えたテントの完成 園で野草を採ろうと誓いの葉を集める マムシ、ハチ、ツタウルシについての説明	担任2名 園長 保護者5名	畑尾 野村	鈴木 学生ボラ1名
9	7月9日(月) 10:20-12:30	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、自分らしさを発見する。②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。③小川の周辺に自然に生えながら、水遊びなどを楽しむ。	知履氏から薪についての説明 田んぼの話を聞き、苗の成長を確認 田んぼの草取り(裸足や長靴のままなど) インガメやサワフワフワ二を発見し野村氏に報告	担任2名 園長	畑尾 野村	鈴木 学生ボラ1名
10	7月9日(火) 10:15-12:30	①里山の中で、自然を見つめたり働きかけたりしながら、自分らしさを発見する。②自然の中で必要なルールがあることを体験しながら感じる。③小川の周辺に自然に生えながら、水遊びなどを楽しむ。	鈴木氏から月間川の地層の説明 斜面を下って角間川での自由行動 生き物探し、草舟作り、石探し、ターザンごっこ 貝の化石や葉の化石の発見	担任2名 園長	畑尾 野村	鈴木 学生ボラ1名

注 6) 2回自由出版の読覧はないが、森への挨拶とお祈りは、アジチ谷への出発前に毎回実施された。

7) 西巻孝子・作絵『わたしのワンピース』こぐま社 1989年

里山自然活動の当日のスケジュール 活動日によって多少の相違はあるが、概して、以下のスケジュールで進められた。K 幼稚園に関しては、9時50分頃に幼稚園からバスで角間の里に到着、森への挨拶を終えた後にアジチ谷に出発し、10時15分頃にアジチ谷に到着、その日の活動に取り組んだ後、12時10分頃にアジチ谷を出発して12時20分頃から角間の里で昼食、13時頃に角間の里を出発してバスで幼稚園に帰るというスケジュールであった。B 幼稚園に関しては、10時15分頃に幼稚園からバスで角間の里に到着、森への挨拶やお祈りを終えた後、10時30分頃にアジチ谷に出発し、その日の活動に取り組んだ後、11時40分頃にアジチ谷を出発して12時15分頃から角間の里で昼食、13時頃に角間の里を出発してバスで幼稚園に帰るというスケジュールであった。

分析対象資料 K 幼稚園、B 幼稚園とも、活動前日までに当日の活動案を作成し、里山プロジェクト関係者が登録しているメーリングリストを通して関係者に配布した。B 幼稚園保育者、木谷氏、笠木氏、筆者は、活動実施後数日以内に、自身が参加した活動の内容や感想、反省等から構成される報告文書を作成し、メーリングリストを通して配信した。本研究では、それらの資料を分析対象とする。

結果と考察

2013（平成25）年度前期（4～7月）のK 幼稚園の里山自然活動の概要を表1に、B 幼稚園の里山自然活動の概要を表2にまとめた。

K 幼稚園の里山自然活動 以下、K 幼稚園の里山自然活動において見受けられた子どもの様子を中心に、筆者が作成した報告をもとに、より詳細に記述する。

<第1回 4月18日（木）> 写真1, 2

・子どもたちは、初めて出会うインストラクターに短時間で親しみを抱き、積極的にかかわっていた。子どもたちは、安心してその場にいる。

- ・どろどろの田んぼに裸足で入ると聞いて不安になり、養護教諭から離れられなかったAは、草探しやヨモギ摘みには張り切って取り組んだ。草探しやヨモギ摘みでは、木谷氏の指示をよく聞き、ゆっくりではあるが、彼女なりのペースで草を見つけていた。
- ・園とも家庭とも異なる環境で、子どもたちはやや浮き足立っている。自然に飲み込まれているといった印象も受ける。もしくは、周囲にある初めて見るもの、興味を引かれるもの、面白そうなもの等々に目移りして、それらの情報処理で精一杯で、保育者の指示に耳を傾けることが難しいといった様子か。好奇心の赴くままに行動することが許されることがあまりない現状にあって、この活動の時だけは、それが比較的許されるという意味では、一つの聖域といえそうだ。



写真1 森への挨拶の後、森の声を聴く



写真2 アジチ谷でのヨモギ摘み

<第4回 5月15日（水）> 写真3, 4

- ・子どもたちは、第1回活動時に比べれば落ち着いている。子どもたちの表情も、不安は少なく穏やかである。
- ・S, H, Y が田んぼに入り、自称どろどろ星人になる。まず、S が片腕を田んぼにつけてどろどろにする。筆者大笑い。周囲のY, H も大笑い。S は反対の腕も泥につけ、H やY も同様に上半身を田んぼにつけ始める。行為を否定する大人がいないことの自由。
- ・男児数名が、野村進也氏（金沢大学環日本海域環境研究センター自然計測領域生物多様性研究部門連携研究員）の側で水生生物をつかまえている。野村研究員の網を借り、水たまりから何かをすくっては、中を確かめている。表情は真剣である。男児：「ヤゴがいた」→野村研究員：「どうしてヤゴってわかった？」→男児：「足がこうなっているから」と腕を直角に曲げてみせる。→野村研究員：「そうだね」
- ・「自然（里山）」とのかかわり方に、「してはいけないこと」や「危険なこと」はあるが、基本的に「間違い」や「不正解」はない。「これでいい？」と聞く必要はあまりない。かかわり方は、全員に、平等に、公正に開かれている。「自然（里山）」に関する知識を誰かが知っていることに対して、またその知識を他者に伝達していくことに対して、伝達される側に立つことに対して、不必要な優越感や劣等感を覚えることはおそくない。尊敬、羨望、憧れ、知的好奇心の喚起はあるかもしれない。



写真3 担任と田んぼの中で泥んこ遊び



写真4 野村研究員と生き物探し

<第5回 6月4日（火）> 写真5, 6

- ・アジチ谷に行く途中で、「うるしがあるから触っちゃだめだよ」「どれが触ったらいけないかわからないから、（全部）触らなければいいんだよ」という発言が見受けられた。子どもたちなりに、どうすればよいのかを考えている。“全く触らない”という選択は極端ではあるが、合理的でもある。そういう時期を経て、子どもたちはどのように変容していくのか（またはしないのか）。
- ・田植えは少々難しかったかと思うが、一生懸命考えながら植えていた。縦線と横線が交わる交差点を探した結果、田植え担当部分の田んぼの右半分からはみ出し、左半分の交差点に苗を植えていた子どもが何人かいたが、一心不乱に交差点を探した結果である。
- ・田植え後、子どもたちは思い思いに、自分たちが選んだ場所で活動していた。大人に「何をしたらいい？」「どうしたらいい？」と聞く子どもは少なかったように思う。子どもたちは、田んぼの泥がついた足に砂をかけると泥が取れやすくなるという現象に気づき、それを“砂石けん”と名付けて足を洗っていた。子どもたち曰く、昔はみんなこうした“砂石けん”で足を洗っていたそうである。10名近くの子どもが“砂石けん”で足を洗っている。一見、静かな場であったが、多くの刺激を得ていたことだろう。例えば、手から砂を落とす感覚、手から砂が落ちる速度（途中からは

予測を立て、その結果を検証していたはず)、砂が自分の足に当たる感覚、砂の温度、砂の質感、砂を自分の手で足にこすりつける時の手の感覚、足の感覚等々。



写真5 田植え



写真6 砂石けんで足を洗う

<第7回 7月10日(水)> 写真7, 8

- ・子どもたちにやや落ち着きがなく、保育者の言葉もなかなか入っていかない様子であった。非常に蒸し暑かったことに加え、幼稚園でのイベントが続き、疲労がたまっているということであった。子どもの言動には、色々な背景があるようだ。
- ・Hは非常に手際よく田んぼの草取りをしていた。他児が誤って踏んで倒してしまった稲も上手に立て直していた。彼女の姿は、遊ぶというよりは、仕事をしているといった方が近かったか。
- ・田んぼの草取りに積極的ではない子どもたち

が半数近くいた。連日の疲労がたまっていたことも背景にあるのかもしれない。しかし、みんなで食べる予定の米を育てる上での大事な作業である。田んぼに入らないまでも、畦の草取りをするよう保育者や笠木氏が声をかけていたが、なかなか集まらなかった。子どもたちは「遊び」に来たという意識が強く、「草取り」という「作業(仕事)」に対する意識を明確に持てなかったためだろうか。また、「田んぼには田植えの時にいったからもういい」という意識も見え隠れしていたようだ。なかなか難しい。

- ・田んぼから出て、水たまりで足を洗った後、大きな笹の葉で拭いて仕上げをするという一連の手順が、着替える前の手続きとして浸透していた。多くの子どもたちがその手順に従って準備をしておき、保育者にも手順を伝えている。帰りの仕度も随分と手早くなった。
- ・斜面に昇り、体のバランスをうまく取りながら、足を拭く笹の葉をちぎり取る男児、それを受け取る男児、更にそれを受け取って足洗い場に運ぶ男児がおり、役割分担が自然に発生していた。それぞれが得意なこと、できること、好きなことを分担しているようだ。



写真7 田んぼの草取り



写真8 笹の葉のコップでお茶を飲む

K 幼稚園に関しては、ほぼ月1回の頻度で里山自然活動が実施された（表1）。それまでも、自然物に触れる保育を意識的に取り入れてきた園ではあったが、長期間に渡り、また定期的に里山を訪れるということは初めての取り組みであった。K 幼稚園の保育者によれば、幼稚園での生活において、里山自然活動での経験を基盤とするような言動が随所に現れてくるといったことが見受けられたようだ。

中でも印象的な2件の展開事例を紹介する。まず、里山の草（ヨモギやスイバ等）を食べるという経験とその後の展開である。子どもたちは、第1回活動（4/18）において、自分たちで摘んだヨモギを使用したヨモギ団子をみんなで食べたが、その直後から、道端のヨモギを見つけては保護者に教えたり、ヨモギ団子を家でも作って欲しいと保護者に訴えたり、道端の草を見て「食べられるかな」と考えたりという子どもたちの様子が、幼稚園に相次いで報告されるようになった。そして、K 幼稚園の食育関連サイトに、有志の保護者がヨモギ団子のレシピを公開することにつながっていったという経過は、大変興味深い。また、第1回活動から1週間が過ぎた4/25（木）に、昨年度育てた小カブの残りがプランタに残っていたのを片付けようとした折に、子どもたちから「食べたい！」との声上がり、早速、幼稚園で茹でて食べることになったそうだ。養護教諭が、茹でた小かぶと味噌に砂糖を加えたものを、弁当の蓋に少しづつ

配った。1cmにも満たない小さな小カブのスライスであったが、「おいしーい」「甘くておいしいね」「味噌は甘いけど葉っぱは苦いね」と話し合いながら、好き嫌いも言わず、全員が食べたそうだ。里山自然活動での経験から、「草は食べられる」ことを子どもたちは知った。身の回りにおける自然物（この場合は草）を認識する際に、「食べられるか食べられないか」という基準が加わったとあってよいだろう。野草が全て食べられるというわけではないため、今後は「食べられる草と食べられない草がある」ことを認識していくことが求められるが、「食べられるか食べられないか」という新しい基準を得たことにより、子ども自身の視界の中に自然（というよりも草かもしれないが）が映るようになったといえそうだ。

次に、里山での活動を取り入れた遊びの展開である。K 幼稚園の5歳児クラスの子どもたちは、プレイルームの大型積み木を自分たちで組み立てて、迷路やアスレチックを作ることが多いが、里山自然活動開始後は、大型積み木を組み立てて里山を表現し、それらを渡ったり通ったりしながらの遊びが始まったそうである。また、第5回活動（6/4）において田植えに取り組んだ翌日、幼稚園の園庭の赤土のエリアを田んぼにし、草を苗に見立て、田植え遊びが始まったそうだ。田んぼの横には、丸太や可動式つり橋を並べて、里山のアジチ谷に向かう道も作られていた。こうした子どもたちの姿から、田植えが子どもたちにとって意味のある、心を揺り動かされる体験になっていたことを確かに感じたという保育者からの報告があった。

子どもたちは、里山自然活動での経験を、幼稚園や家庭における日々の生活にも自由に持ち込み、楽しんでいるようである。里山に行っていない期間においても、里山での自然活動の経験が、日々の活動の背景に存在しているともいえそうだ。K 幼稚園の活動は、ほぼ月1回という頻度で実施されたが、そのために里山での自然活動がより新鮮に、また印象的に受け止めら

れたであろうし、また、子どもたちそれぞれが、自身の生活の時間の流れに合わせて、里山での経験をゆっくりと味わい、また自身の生活に落とし込んでいく時間を確保することができたといえるかもしれない。

B 幼稚園の里山自然活動 以下、B幼稚園の里山自然活動について、具体的な活動内容を中心に、笠木氏及び筆者が作成した報告をもとに、より詳細に記述する。

<第1回 4月19日(金)> 写真9, 10

- ・子ども同士のハグ、草木とのハグをためらう子どもは少ない。最初から積極的にハグし合っている子どもが多い。
- ・木谷氏からの「山が入ってもいいって言った？」という問いかけに、「うん!」「言った!」と即答する子どもたち。空想と現実とを自在に行き来するこの時期の子どもたちならではの反応であり、大変興味深い。自然の中にいると、空想と現実の往来がより容易になるのかもしれない。
- ・大人からの促しがなくとも、自ら田んぼに「入りたい」と言う子どもたち。「いいよ!」と保育者。長靴で田んぼに入っていく。そのうち裸足になって田んぼに入る。その時々で、保育者が子どもの背中を「少し」押している。
- ・子どもが「一人」で発見したことを、どのようにして「友達」や「保育者」、そして「クラス」全体で共有していくようになるのか。一人で楽しむ世界と、みんなで楽しむ世界において、自然はどのような立ち現れ方をするのだろうか。



写真9 アイスブレイクでのハグタイム



写真10 田んぼに入って遊ぶ

<第5回 6月6日(金)> 写真11, 12

- ・子どもたちが、それぞれ首から様々な手作りの道具をぶら下げている。牛乳パックで作った虫かご(蓋付き)、宝物入れ、厚紙とビニールで作った虫取り網等々、3つも4つも首から下げている子どももいる。虫が逃げないように工夫していた子どももいた。保護者と協力して作った子どももいたようだ。ひとり一人の工夫を尋ねてみても面白そうだ。
- ・木谷氏がキイチゴを教えてくれた。木谷氏が「食べてみる勇気がある人!」と投げかけると、2/3ほどの子どもたちが「はい!」と手を挙げる。手を挙げない子どももいるが、真剣に見つめている。数名がキイチゴを口に入れてもらった。子どもたちが次々にキイチゴを探し始める。木谷氏は、子どもたちに「この辺り」というヒントを与えて、自分で探すように促している。保育者も、キイチゴを自

分で探すことができる子どもにはその機会を保障し（大人は極力何もしない）、そのことが難しいであろう子どもには、様子を見計らって支援をしていた。

- 子どもたちは田植えの説明を真剣に聞いていた。田んぼの端から端まで渡された紐に、等間隔（約 25cm 間隔）にピンクのリボンが結びつけられており、子どもたちはリボンの場所に苗を植えていった。子どもたちは苗を植える回数を重ねるごとに、徐々に上手になっていった。2 班に分かれ、班ごとに順番に田植えに取り組んだが、最初の班よりも、次の班の子どもたちの方が田植えの手つきがよかった。園長や木谷氏も触れていたが、「見る」ことで活動をシミュレーションすることができていたようだ。「見て真似る」は学びの一つの原型である。



写真 11 田植えの説明



写真 12 田植え

<第6回 6月24日(月)> 写真13, 14

- 5 歳児クラスと 4 歳児クラスがペアとなり、年長児がリードしながらアジチ谷に向かった。年長児が年中児にツタウルシを教える姿も見受けられた。
- 炭焼き小屋の近くにヤマグワが実っていた。木谷氏に手渡され、子どもたちは甘く熟した紫色のヤマグワの実を食べた。
- アジチ谷に到着すると、5 歳児クラスと 4 歳児クラスに分かれて活動した。5 歳児クラスは、稲の成長を確認すると、田んぼ周辺で自由に遊んだ。それぞれが自身の興味のあることに取り組んだ。



写真 13 ヤマグワの実を食べる



写真 14 アジチ谷での生き物探し

<第7回 6月25日(火)> 写真15, 16

- 子どもたちに、昨日（6/24）里山で見たものを聞くと、昆虫、へび、カエル、鳥、キノコ等、次々と回答していた。昆虫もカマキリ、

トノサマバツタ、チョウチョ、クワガタ等多様な名前が挙がった。

- ・野村研究員から、アシナガバチの巣があることについて話があった。まだハタラキバチも孵化していないようだったので、子どもたちに巣を確認させながら、静かに通った。
- ・水の溜まり場でカエル等の生き物を観察するグループ、畔を歩くグループ、日陰を作るためのテント作りに取り組むグループ、座り込んで遊ぶグループ等に分かれて活動した。
- ・田んぼの横の池の樹上にモリアオガエルの卵塊を観察することができた。野村研究員からモリアオガエルの産卵の場所について説明があり、トンボの産卵の様子、トンボの種類や見分け方についても説明があった。



写真15 アジチ谷でのままごとごっこ



写真16 日陰を作るテント (6/27 撮影)

るが、深みがあるところもある)で、初めての川遊びに取り組んだ。

- ・笠木氏から角間川で観察できる地層について説明があり、川で見つけたものは持っていかないという注意も受けた。
- ・川では担任2名が両端に立ち、その先には行かないことを子どもたちに伝えた。子どもたちは、生き物探し、笹舟流し、石探し、水のかけ合い等に取り組んだ。宿泊保育での川遊びに持っていく予定の筏を試している子どももいた。
- ・笠木氏は、化石の層が見える場所について、敢えて伝えなかったが、活動を開始して15分が過ぎた頃、子どもたちが地層の中に貝の化石を発見した。川底にも化石や地層の破片があり、葉の化石を見つけた子どももいた。
- ・子どもたちは、ザリガニやサワガニ、小さなエビ等を見つけると、次はサワガニがより多くいる場所を見つけようとしていた。少し深みがある場所では、木から垂れ下がったクズの蔓にぶら下がって勢いをつけて飛ぶ遊び(ターザンごっこ)も展開された。



写真17 川遊び開始

<第10回 7月9日(火)> 写真17, 18

- ・角間川 (川幅 2m~4m, 水深平均 10cm であ



写真 18 ターザンごっこ

B 幼稚園は、里山自然活動を数日間継続して実施するという点で極めて特徴的である(表2)。月曜日から水曜日まで、毎日里山に入って活動に取り組むこともあった。子どもたちにとっては、里山が日常的な遊びの場(に近い存在)となっている。つい先週も行き、昨日も行った里山である。子どもたちは、昨日までの活動を踏まえて、自身で遊びの見通しを立てながら、当日の活動を構成していく。次に、B 幼稚園の保護者の支援について言及したい。B 幼稚園の子どもたちは、毎回、様々な手作りの道具を持って里山にやってくるが、保護者と一緒に道具を作った子どもも多かった。それぞれ、家庭において、どのような会話が交わされながら道具が作られていったのかを確かめたくなるほどの工夫と出来映えであった。里山自然活動を、温かく静かに支えている保護者の存在がうかがえる。また、B 幼稚園の保育者の子どもへの支援に関する理念も一貫していた。基本的に、子ども自身でできることは子どもに任せ、保育者は背景に回る。そして、子どもがそのことを達成できるまで、ゆっくりと待つ時間を確保するよう努めていた。また、支援が必要であるかどうかを判断するための時間も比較的多く取り、支援が必要であると判断されたところで初めて支援を講じていた。

現在、日本の多くの森のようちえんで大切にされていることとして、①自然と親しむ(四季折々の自然の営みを五感で感じ、豊かな感性を

育む)、②遊びこむ(比較的ゆるやかな時間の制限の中で、また、ほとんど空間的には制限されていない場所で、思い切り自由に遊ぶ。心と体のバランスのとれた発達を促す)、③自主性を養う(子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる雰囲気を作る)、④友だちや大人、動植物とかかわる、⑤保育者と保護者が、ありのままの幼児の姿を受け入れ、幼児の育ちを信じて待つ姿勢を重視し、ともに育ちあう、という5点が挙げられる(今村, 2011)。①と④は比較的達成されやすいといえるが、B 幼稚園の活動は、②遊びこむ、③自主性を養う、⑤保育者と保護者が、ありのままの幼児の姿を受け入れ、幼児の育ちを信じて待つ姿勢を重視するという理念を体現しており、また体現していけるよう誠実に実践を重ねているととらえてよいであろう。ただ、筆者がB 幼稚園の活動に十分に参加できなかった点が悔やまれる。B 幼稚園ならではの活動に参加し、活動内容を詳細に記述して分析するという貴重な機会を十分に確保できなかったことは、極めて遺憾である。

課題と展望

本プロジェクトの特徴の1つは、多様な背景を持つ専門家が、互いの顔が見える距離を保ちながら協同で企画、運営しているという点である。自然学校インストラクター、農業従事者、保育者をはじめ、地域連携、環境教育、発達心理学の研究者などが集まり、里山プロジェクトという枠組みの中で、子どもたちの育ちと里山自然活動との相互関連性を明らかにするという目的を共有しながらプロジェクトを展開している点は極めて意義深い。本研究では詳細に報告することができなかったが、例えば自然学校インストラクターの木谷氏の子どもへの接し方や、情報の提供の仕方は熟考されており(例えば、子どもより先に大人が意見や感想を伝えることを避けたり、子どもに尋ねられる前に自然物の名前を教えることを避けたりしながら、子ども自身が味わったり考えたり言語化したりする時

間や機会を確保する), そうした木谷氏と子どもとのやり取りを定期的に観察することができたことは, 筆者にとっても保育者にとっても意味のある学びにつながった。また, 里山プロジェクト試行の初年度から, K 幼稚園と B 幼稚園という, 異なる活動実施形態を採用した幼稚園に参加していただけたことにも言及しなければならない。2 種の里山自然活動プログラムを同時に展開し, また評価することを通して, それぞれの活動の成果と課題を全員で共有できたことは特筆に値する。

本研究の課題は, 2013 (平成 25) 年度前期 (4 ~7 月) の活動の概要の紹介に留まり, 活動を通しての子どもの変容について, 詳細に分析し報告することができていない点である。更には言えば, 里山での具体的な活動に臨む子どもたちの姿を把握することについては, ある程度達成できたが, 子どもたちが何を学び, 何を得たのかについて, 里山以外の場所での姿を通して確認することが十分にはできなかつた。加えて, 保護者の変容や保育者の変容について追跡し, 分析することも残されている。

今後は, 里山自然活動の実践の場が有する意味を解明しつつも, 子どもたちが里山自然活動を通して学んだことを, 里山以外の場においていかに発揮していくのかについて, より客観的に把握する方法を見出しながら子どもの変容を詳細にとらえていくことと, 子どもの変容のみならず, 保護者や保育者の変容の追跡も視野に入れながら, 研究を展開していく必要がある。

引用文献

今村光章 2011 森のようちえん: 自然のなかで子育てを 解放出版社

てを 解放出版社

井上美智子 2012 幼児期からの環境教育: 持続可能な社会にむけて環境観を育てる 昭和堂

井上美智子・無藤隆・神田浩行 2010 むすんでみよう子どもと自然: 保育現場での環境教育実践ガイド 北大路書房

石亀泰郎 1995 森のようちえん 宝島社

厚生労働省 2008 保育所保育指針: 平成 20 年告示 フレーベル館

文部省 1996 中央教育審議会第一次答申: 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm (2013 年 9 月 26 日閲覧)

文部科学省 2008 幼稚園教育要領: 平成 20 年告示 フレーベル館

文部科学省 2013 第 2 期教育振興基本計画 (本文) http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_jicsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf (2013 年 9 月 26 日閲覧)

小笠原明子・前田泰弘 2009 野外保育による幼児の「育ち」の支援 保育学研究, 47, 121-131.

佐々木豊志 2008 平成 19 年度文部科学省「青少年の意欲向上・自立支援事業」意欲を育む自然体験活動「森のようちえん」推進事業報告書

仙洞田結・山内紀幸 2011 幼児の環境教育に関する事例的考察: 「森の幼稚園」の教育実践 山梨学院短期大学研究紀要, 31, 89-100.

謝 辞

本研究にご協力いただきました幼稚園教職員の皆さま, 保護者の皆さま, 里山プロジェクト関係者の皆さま, そして, 暑い日も雨の日も活動に参加し, 私たちに多くの学びの機会を提供してくれる子どもたちに深謝申し上げます。